

あかし

弱さを誇る

ながずみ
長住教会
(福岡/福岡地方連合)
よしむらまゆみ
吉村真由美



キリスト教の信仰を得て三二年が過ぎました。私の信仰生活は、障がいを抱えた娘の存在を抜きにしては語れません。娘は、「点頭てんかん」という重い病と知的な障がいを抱えて生まれてきました。病名とその症状を告げられた時には、すべての感情が凍りつくかのようなショックを受けました。娘が二歳になった頃、図書館で偶然『聖書に見る人間の罪』という三浦綾子さんの本に出会いました。その中で、障がいとは、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」というヨハネによる福音書九章の教えに触れました。生まれて初めて骨身に沁み入る言葉でした。その言葉は、凍

りついたかのような私の心を解し、住まいの近くにあった日本基督教団の教会に通うきっかけとなりました。娘は、話すことも歩くこともできないかもしれないと診断されていましたが、保育園に通い始めると、「おはよ」「ちは」と

離婚という選択をし、居住地であった東京を離れ、娘を施設に託したことに後ろめたさを感じていたからです。

しかし、思い起こせば娘と共に生きた日々、重い障がいを抱えた娘を育てるといふ役割を担い、自分の力が及ばない出来事に数多く出会いました。そんな無力さの中で、イエスさまに出会い、教会に繋がってきたのです。幼子のようにイエスさまを求める娘の姿が離れ住む今も脳裏に焼き付いています。その姿がしきりに思い出され、再び、教会に導かれました。

新たに訪れた長住教会で「



娘の浩子さん

の待つ家」という創立記念日のために作られ

た賛美歌を聴きました。自分の弱さを認め、再びイエスさまを求めた時、イエスさまが教会で待つていてくださったのです。すべてのことには人智を超えた計らいがあり、必要なものはすべて与えられるということを経験を通して教えられました。世界は今、新型コロナウイルスによる百年に一度とも言われる危機に瀕しています。これまでにない不安や怖れに見舞われ、祈りを重ねる中で、本当にお祈りすべきものはコロナウイルスではなく、全能の父なる神であることを思います。

今、まさに一人の信仰者として、私に誇れるものがあると思えば、それは、自分自身の弱さかもしれない。弱さの中にこ

挨拶の言葉を覚え、「アーメン」と言えるようになり、「主の祈り」を唱えることができるようになりました。幼い頃から、教会に行くことが大好きで、受付の当番や献金の祈りを喜んで引き受けていました。難しい教義の理解はできませんが、信仰への熱意が認められ、牧師先生の勧めにより、一七歳の時に日本基督教団下石神井教会で洗礼を受けることができました。現在、三六歳になった娘はケアホームで暮らしていますが、支援員の方がたに見守られ、月に一度か二度、熊本のバプテスト派の教会に通っています。一方、母親である私は七年間教会から離れていました。やむを得ない事情があったとは言え、

そ、イエスさまが働いてくださるからです。最後に自作の短歌二首を添えます。

いくたびも
竿竹売りが通る午後
ふいに重たし
われの十字架

ポプラの葉
からからと散る並木道
天にゆくには
落ちねばならぬ



<本のご紹介>
吉村さんは「夏野いづみ」というペンネームで2011年に娘さんと生きた25年間をつづった手記『お月さん、とんでるね』（銀の鈴社）を出版しています（ネット書店や一般書店で購入可能）。